

『老婆心書』の著者羽佐間宗玄と杉本仲温良

深瀬泰旦

はじめに

近世末期になって漢字仮名まじり文という独特な形態をもち、識字率の上昇とあいまって庶民の中に静かに浸透していった一群の医学書が登場した。この系統に属する書物として、羽佐間宗玄の『老婆心書』の存在は古くから知られているが、その内容や著者についてくわしく述べた論著は少ないようである。

江戸期の随筆などに散見する羽佐間宗玄の断片から、宗玄の人物像をあきらかにし、あわせて『老婆心書』に序文をよせた幕府侍医杉本仲温良についても、その系譜をあきらかにしえたのでここに報告する。

在来の研究業績

羽佐間宗玄、あるいはその著『老婆心書』にふれた論著は、渉猟しえた範囲では次の如くである。

(一)佐伯理一郎 日本女科史(明治三四年)

本邦女科書目録に

老婆心書 羽佐田芝瓢著 文化一三年 二冊 刊本⁽¹⁾

とある。

(二)富士川游 日本医学史(明治三七年)

江戸時代の医学・季世 児科の項に

同時(文化・文政ノ頃)羽佐間宗玄(名ハ資承、芝瓢ト号ス)アリ、小方脈ニ精シキヲ以テ名アリ。ソノ著老婆心書ヲ見ルニ、ソノ論說ハ古今ノ諸家ヲ折衷シ、殊ニ和蘭ノ方ヲ採リ用ヒタルコト尠カラズ。⁽²⁾
としるされている。

(三)富士川游 日本小兒科史(大正二年)

羽佐間宗玄 名は資承、芝瓢と号す。江戸芝に住し、小方脈に精しきを以て名あり。文化一四年、老婆心書二巻を著して、小兒の胞衣より、急慢驚風及び痘疹の事を説けり。⁽³⁾

富士川は両著において宗玄を「小方脈ニ精シ」として、むしろ名ある小兒科医としてあげている。

(四)緒方正清 日本婦人科学史(大正三年)

本書の年表中、文化一三年の項に

羽佐田芝瓢 老婆心書を著はす⁽⁴⁾

とある。

(五)緒方正清 日本産科学史(大正八年)

徳川後期における産科書一覽に

羽佐田芝瓢 老婆心得⁽⁵⁾ 文化一三年

としるしてあり、年表には文化一三年の項に

羽佐田芝瓢 老婆心書を著はす⁽⁶⁾

とあって、著者名を羽佐田としている。本文にのる書名老婆心得は、巻頭にあげている引用書目にも老婆心得とあって、

かならずしも誤植とはいきれない。

(六) 梶完次 日本産事紀要(昭和一〇年)

腹帯と断臍の寸法を論じた箇所

羽佐間宗玄(芝瓢) 老婆心書 文化一三年⁽⁷⁾

とある。

(七) 梶完次 明治前日本産婦人科学史(昭和三九年)

羽佐間宗玄と「老婆心書」の項で

文化一四年(一八一七)「老婆心書」二巻を著す。書中専ら妊娠、新産児の養生手当に就て論じ、又特に妊娠腹帯に就て強く緊縛することを戒む。閱歴詳ならざるも賀川家の門弟又は其流を汲むで後、東都に開業せる人なるべし。⁽⁸⁾

佐伯、緒方の著書では、その姓が「羽佐田」と誤ってしるされており、書名も一部誤って記載されている。その発刊の年は文化一三年と文化一四年の二説があり、国書総目録においても版本として、文化一三年版、文化一四年版の二種類があげられている。しかし文化一三年版とされている京大富士川文庫本、杏雨書屋本とも、それぞれの目録をみると文化一四年刊としてある。いずれにしても書名、著者名、刊行年のそれぞれに、かなりの混乱がみられている。

『老婆心書』⁽⁹⁾

『老婆心書』は上下二巻よりなる(図1)。青表紙、大きさは二六×一八センチメートル、題簽は老婆心書、見返しは右から、羽佐間先生口訣 老婆心書 櫻寧軒蔵板とある。序文は二つあって、一つは文化一三年丙子春三月の日付をもつ自序であり、その署名は東都羽佐間資承宗玄甫となっている。他の一つは文化一四年丁丑春三月下澣の日付をもつ、東都待医法眼杉本良の序文である。



図1 『老婆心書』の扉

奥付には文化一四丁丑歳秋七月 書肆 京堀川高辻上ル所
植村藤右衛門 大坂心齋橋筋北街 河内屋吉兵衛 東都日本
橋通四丁目 鴨伊兵衛とある。なお門人田辺玄樹の跋が下巻
の巻末にあるが、その内容は宗玄の自序とほとんど異なるこ
ころがない。

宗玄は自序で本書が成立した経緯をのべている。それによ
ると宗玄が日々口授した所をそのままに放置しておくのは忍
びないとして、弟子たちがこれをまとめてくれた。この書を
宗玄は『老婆心書』と名づけたが、その後これを出版したい
と申し出たので、これはたんに自分の心覚えのメモにすぎないのだから、出版なんてとんでもないととりあわなかった。
しかし弟子たちは引さがらず、先生に教えていただいたことを病人に施してみたと、十人のうち八、九人は治癒し
て、悪い結果になったことはない。これを出版して皆に読んでもらえば、世を益するところがおおきいだろうといわれ
て、ついに出版をゆるしたというのである。

杉本良の序文は、小児はみずからの症状を口にすることがないので、その症を把握することが影をおい、風をつかむよ
うで、その診療は成人よりもむずかしい。いろいろな医師が各自このむところを主張して、あるいは温補をこのみ、ある
いは寒涼をのぞむので、中正にかなった治療ができずに小児を死亡させている場合がおおい。このたび羽佐間宗玄が国字
をもって老婆心書をあらわしたが、国字でかいてあるからといって、この内容を軽んじてはいけない。丁寧に表示されて
いるからといって厭わないでほしい。これも宗玄が老婆心からそうしているのだから、とのべている。ここに本書が『老
婆心書』と名づけられた所以がしめされている。

二つの序文が漢文でかかれているのに反し、本文は上巻二五丁、下巻二六丁、每半版一一行、行二〇字から二五字で、漢字仮名まじり文でかかっている。第一丁にみるように、羽佐間先生がみずから授ける秘術を、門人四人がこもこも述べるという形をとっている。凡例に

是書也論古今諸名流医説之是非及刀圭多少補瀉溫涼調理飲食好惡宜忌無所不兼備焉其以国字者則為令衆人易見耳

とあって、漢字仮名まじり文をもちいた理由をあきらかにしている。

(一)自然のままに育てよ

まず小児を育てるうえでもっとも大切なことは、自然のままに扱うことであるとのべている。

賤者辺鄙は医者もとほしく、小児は誠に拾育にて、すぎ洗濯等のうちは、哭こと構はず、拾置ゆへ己が勝手に寝転ねころもはやく、自然と力持する人の、骨のかたまりて力のつくと同事にて、歩行も早く、譬の通り、毛を吹ぬゆへ疵を求めぬがごとく、是天然そだちなり。(上巻二丁)

ところが高位、大祿、富豪の家では、これと反対に目いっぱい手をかけ、大事に大事に育てているので、これがかえって「天然流は少しもなく、地獄の責の毛吹流」(上三丁)となつて、小児はますます弱くなつてしまふ。この「毛を吹いて疵を求むる」とか、「毛吹流」とかの言葉は、本書の随所にくりかえし使用されており、その対極に「天然流」をおいて、この言葉の意味するところを明示している。「吹毛求疵」とは韓非子の大体篇にある語句で、本来毛の中にかくれている疵を探しとめるように、小さな過ちをきびしく追求して吟味することを意味する。毛の中にかくれている疵をほじくり出すように、手をかけなくてもよいことに手をかし、必要のない薬物を投与して、かえって小児を弱くしてしまうことを戒めている。

(二)腹帯・食禁・産椅について

生れおちてからの天然流が大切であることはもちろんであるが、「小児の丈夫不丈夫は、母の胎内よりの養第一なれば、

腹の内より天然のままに成度ものなり」(上四丁)として、妊娠中の心得をといっている。

加川流カガワリウは自然と天然に叶て腹帯を用ず妊娠の婦人に食禁薬等も、平生の人の如く、大黃芒硝石巻を用に少しも害なし。

(上六丁)

妊婦に腹帯をもちいるのは古来からの風習であるが、これについてはその当時でも賛否両論あつて、意見のわかれるところであつた。⁽¹⁰⁾ 賀川流産科はこの腹帯は益がないばかりか、むしろ害があるので、腹帯の使用をやめることを強調して(11)るので、宗玄もこれにしたがつてゐる。

当時の習俗では、妊娠中に摂取してはいけない食物を数おおくあげてゐる。それらの食物を一つ一つみてゆくと、むしろ摂取してよいものを探す方がむずかしいといつてもよいくらいである。それにたいして宗玄は、食事も投薬も、平生の人とまったく同じようにあたえてよいとのべてゐる。

分娩後二一日の間、産婦を産椅あるいは椅褥とよばれる箱の中にすわらせておく風習があるが、『産論』において反対している師説をうけて、宗玄も反対をとなえてゐる。産後の食事についても、「粥に焼塩、味噌漬の香の物ばかり」(上八丁)たべさせることに反対し、こんなものばかりあたえては「ぢやうぶなる産婦にても、ついには病人となりぬ」(上八丁)とのべてゐる。

(三)正産の説と胎児の血液循環

賀川子玄の産科において、もつとも特筆すべき「背面倒首」の説をうけて宗玄は

正産といふは、子の頭より産るを云是は母の胎内にある内より、頭を下にして足の方を上にして、やどり居ものなり。

(上九丁)

とのべ、俗に「子がえり」をして頭から生れてくるといわれているが、腹の中では子がえりする程の場所はないと断定している。

ここで注目したいのは、胎児の血液循環のことである。

臍帯の中に二筋血の出入をする血の通る管筋あり。母の血を胞衣へ受け、それより臍帯の中の筋へ通りゆく事、蓮の茎のごとく、酒をつぐ、じゃうのごとし。先母の血を胞衣へ受て、それより臍の緒の中の片方の血の腹へ入方の管筋の中を通り、小児の臍より入て、臍の中に又肝といふへ通る臍の緒ありて、その臍より中の臍の緒の片方の入方を通して、肝の臓へ血あつまりて、それより小児の一身を回て、又元の肝の臓へもどりて、また腹のうちの臍の緒の片方の出かたを通して、臍より出て、外の臍の緒の中の血の出方の管筋を通して胞衣へもどり、母の軀へかへりて、母の血とともに、環の端なきがごとくに、昼夜休事なく回るものなり。そのめぐる度ごとに小児の体へ少づつ母の血が残て、母の胎内にて乳を吞ずとも、段々と生長する事なり。(上一五丁)

これを見ると、血液が胎児の体内で循環していることをよく理解できるが、胞衣(胎盤)をとおして母体血が胎児の体内を循環し、これがすこしずつ胎児にのこつて、胎児の栄養になるのだ、と説いているのは、現今の胎児循環についての理解とおおいにことなるところである。このような母体―胎児循環の考えは、『解体新書』にすでにみられるところで、その妊娠篇には次のような記述があつて、その表現の類似にはおどろくばかりであり、これを引用していることはあきらかである。

子の子宮にあるや、その養を臍より受く。先ずその母の血を胞衣に受く。その血、浸漬して、その臍帯の血脈に伝え、漸くこれを肝に送り、肝より心に伝え、心よりして一身を周流する者、大人と異なることなし。その血、一身を周流して、而る後、臍帯の動脈より、また胞衣に帰し、その母血と相和すること、環の端なきが如し。⁽¹²⁾(原漢文)

これとともに本書一七丁にのる胎児と胎盤の關係をしめす図は、左右が逆になつてはいるものの、解体新書の「内景及び胞衣連続を示す」図を引用したと考えてよいであらう。富士川が本書を評して、「和蘭ノ方ヲ採り用ヒタルコト尠カラズ」とのべているのは、このことをさしているのであろうか。

この他本書には臍風撮口の予防にもちいている清心丹が、オランダのアンテスハスモシカル (antispasmodica) という薬とよくにている、とのべた箇所がみられるが、富士川のいう「鈔カラズ」という程に蘭方医学をとりいれているとはおもえない。

四 臍の処置と産湯

出産直後の臍の処置については、平安時代以降貴族階級ではすこぶる重要な儀式の一つに数えられており、臍帯切断の寸法についても議論のあるところであった。⁽¹³⁾ 俗間臍帯を長くすれば小児は長命であり、短くすれば短命であるといわれているが、諸書にのる断臍寸法をみると短いのは二寸から、長いのは六、七寸にいたるまでまちまちである。⁽¹⁴⁾ 宗玄は「臍の緒は手一束とて二寸程に切へし」(上一八丁)とのべ、短くきることをすすめている。

当時産湯の湯加減はむしろかなり熱い湯をもちいていたようであり、⁽¹⁵⁾ 出生当日産湯をつかわせなければ痘瘡がかかるくすむ、などといわれて、出産当日に沐浴させないことが流行していた。宗玄はこれにたいして

産湯とて産やいなや、あつき湯にて洗事大にあし。(上一〇丁)

として、熱い湯には反対しているが、産湯をつかわせるのは、

臍帯落て後よくよく乾きたらば、七夜過十日も、十五日もすぎて湯はつかはずべし。(上一二丁)

とのべて、臍帯が落ちるまでは産湯をつかわせてはいけないとしている。

以上上巻二六丁のうち、約三分の一はいわゆる産科学に属する記述であり、その後はいわゆる小児科学の領域にはいる。

五 初乳

出生後、初乳をつける時期についてはいろいろにいわれているが、宗玄は次のように考えている。

乳は出産の時刻より廿四時過て付てよし。産母の乳の出事、廿四時頃より出ものなり。是天然自然嬰兒に用て宜時刻

なり。(上二二丁)

俗間初乳をあたえることを禁止している習俗が流行しているため、諸書にはかならず初乳を与うべきことが強調されているなかで、本書では初乳授乳の可否についてはなんらふれるところがない。

(六)小児の養育の心得

小児の養育については、まず温めすぎの害と、乳汁のあたえすぎの害をといっている。温めすぎの害は、貝原益軒の『養生訓』や、香月牛山の『小児必要養育草』以来、くりかえしとかれているところであるが、このようにくりかえし、声大にしてのべなければならぬところに、俗間温めすぎの傾向が充滿していることが察せられる。

小児の病が乳のあたえすぎによっておこることがおおい、との張子和の説をひき

腸胃に何ほど入といふ事を察せず、一声哭を聞けば、飢と思ひ、急に乳を飲する。その分量をしらずして、吐ざれば不止。小児の飲次第に与ふる事至てあしく、乳の過多のときは湿熱相兼て、吐利の病発る。(上三三丁)

としている。富貴の家は衣服や食物が豊富で温めすぎてしまうので、その小児はかえって弱い子に育ってしまい、これに反して貧しい家の小児は食物も充分でなく、手も充分でなく、かまってもらえないので、かえって丈夫に育つのだという。

貧しい家庭で小児を育てるために、理にかなない、自然にかなっていることが四つあると次のように要領よくまとめている。

衣薄く、食物厚味なく、怒る事少し。是一つなり。金銀なきゆへ薬少く、庸医熱薬を以て攻ず。是二つなり。母の胎内にある時、母よく働故氣血も廻よく、充実なる事。是三つなり。母よく動作する故産も易し。是四つなり。(上二

三丁)

(七)小児の疾患

小児の疾患については臍風撮口、驚口瘡、急驚風、慢驚風、蛔虫症、鹹病、鮮顛、龜背などについて、下卷二六丁すべてをこれにあててくわしくのべている。成人ばかりでなく、小児にもまある疾患として、中風、痿躄についてもふれている。

(六) 上手な医者のかかり方

現今の言葉でいえば「医者のかかり方と良医の見わけ方」を説いている文章があることから、本書が医師でない人びとを対象としていることをしるることができる。

病人を不心実にしても病家を深切にする医者を、上手と思ひ、病人を心切にして、病家を不心切にすると、下手医者と思ふ世の中なり。病家を心切にすると云は、この病人は附子人參はあしきと思へども、側の人の気かねて、薄着はわるきの人參よ灸よと、病家の気に入やうにする、巧言令色の医者の事をいふなり。病家も心を付医者をよく見立て、たのむべき事なり。(下卷二五丁)

このように医師の見わけ方をしめた後、すべて人は「医心」を身につけなければならないと教えている。

小学にも親につかふるもの医を学ぶべしとありて、親のなき人なければ、人たるものは医を心掛べきとの教なり。

(下二五丁)

ここにいる医とは何か、という説明が本書で充分なされているとは思えない。この議論が下卷の最後におかれていることは、医とはそれまでに本書でのべられている医療をもふくめた、養生の術をさしていると考えてよいであろうが、充分議論がつくされていないので、読む者に何かものたりなさを感じさせる。本書の板行から九年たった文政九年(一八二六)に刊行された『為己執記』において、そのたりないところを補っているところからも、そのことに宗玄自身も気づいていたのかもしれない。なお宗玄の著作はこの二書のみである。

羽佐間資承宗玄

羽佐間宗玄は老婆心書によると

師在京の比は三代目玄悦子の門人と成皆伝たり。(上五丁)

とあって、京都の賀川玄悦の門人であったことがわかる。この三代目玄悦とは、『産論』の著者賀川玄悦の義理の孫にあたり、岡本氏からはいって、二代玄迪の養子となった玄悦子全(一七六〇—一八〇四)である。京都一貫町松原下ルにすみ、阿波侯につかえて産科をよくした。玄悦子全が当主として活躍したのは、養父玄迪が死亡した安永八年(一七七九)から、四五歳で死亡する文化元年(一八〇四)までなので、宗玄が京都で産科を学んだのも、この二五年間のことである。

宗玄という名も、あるいは師の玄悦の一字をもらったのかもしれない。しかし『賀川家門籍』⁽¹⁷⁾には宗玄の名を見出すことができないので、老婆心書の記載をうらづける史料はみとめられない。しかし本書をみるかぎり賀川流産科の流れをくむものであることはあきらかである。

江戸時代の医師名簿ともいべき『江戸今世医家人名録初編』のハの部に

児 芝口三町目日蔭町 羽佐間宗元⁽¹⁸⁾

の名がみえる。日蔭町というのは現今の港区新橋二・三丁目あたりで、『芝愛右下絵図』(万延二年)には、日蔭町通りに面して、羽佐間宗玄の邸があり(もつともこの絵図の宗玄は、いま話題にしている宗玄ではなく、その末裔であるとおもわれる)、その隣りには戸塚静海、遠山金四郎の邸もみえる(図2)。

翌文政三年の『今世医家人名録』には宗玄の名はきえて、同じ住所で羽佐間宗順となっているのは、宗元が隠居して家督を宗順にゆずったのであろう。さらに明治二二年の『日本医籍』をみると、芝区芝新銭座町に羽佐間宗玄なる医師がいることがわかる。⁽²⁰⁾ 住居の位置からみて、さきの宗玄の後裔であるといつてよいであろう。

『甲子夜話続篇』巻四七に、医師瓢仙の化物屋敷の記事がある。⁽²¹⁾ 東海道品川宿と川崎宿の間にある東大森村に近ごろ茶

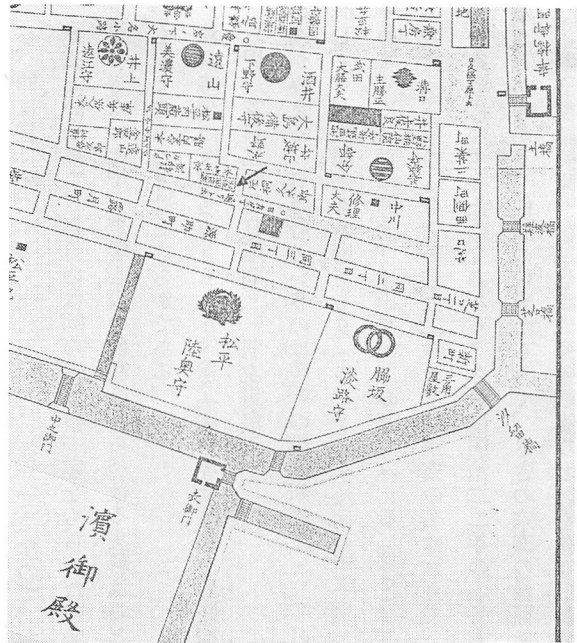


図2 芝愛宕下絵図

屋ができ、その離れ座敷に極彩色の百鬼夜行の図がかかれていて、化物屋敷としておおくの見物人をあつめている。このあたりには幕府の鳥見屋敷もあるので、このまま放置しておくわけにもいかないが、この取締りをどうしたらよいだろうか、という伺書である。結果はこの伺書のとおり、化物の絵や異形の品々をとりはらい、茶菓などの接待をやめさせて一件落着となった。この屋敷の所有者は間宗玄（瓢仙と号する）で、館林城主松平右近将監武厚（のち斎厚と改名）に仕える医師である、と松浦静山はしるしている。

この化物屋敷の一件は、当時かなりひろく知られた事件であったようで、武江年表にも「是の年（文政三年）、大森に於いて化物細工を見世物とす」との記事がみえる。⁽²²⁾

静山は、この話を文政一三年にかきしるしてから四年たった天保五年に、館林侯の邸をたずねた折に、この瓢仙と会った。

今年五月館林侯を訪ねてこの瓢仙に逢たり。有髮なる髡頭医なり。されども痔疾を患て髪ぬけたり逆赤禿なり。酒も能く飲て専ら化物の往事を説きたるが……

と、宗玄の人物像をえがいたあと、化物屋敷の展末をくわしく聞き書きしている。その様子はさきへのべたとくちと差はな

いが、「幽霊出て赤子を人に食するが、其赤子は蝸の煎しめて赤子の如く調えたる杯」とあることないことをいろいろいわれているが、これらは「皆かたも無き空事なりし」としている。

さらに宗玄は、吉良邸討入りにさいして、上野介に初槍をつけた間十次郎光興の後裔であるという。

この瓢仙は、全体音に聞こえし赤穂義士の中、間十次郎が後にして、十次郎が次子なりしが、かの御裁許のとき、有様に申達すれば遠流に処せらるるに依り、匿して言はざりしの末なりと。因て近頃までは波坐間と名乗あしが、はや百年も過て、この程は構もなければ本氏を称るとぞ。⁽²³⁾

とある。幕府は四十七士に切腹を申しわたしたと同じ日に、かねて提出させておいた親族書をもとに、一党の遺子一九名を遠島の処分にした。⁽²⁴⁾しかしこの一九名の中に間十次郎の子弟の名はみえず、まして「十次郎ノ次子」というのは、その間の年月を考えると、とても信ずることはできない。今後の研究にまたねばならないところである。

川崎大師平間寺の境内に、ヒョウタン形の石碑がたっている。百五十年の風雪にさらされて、碑の裏面に刻まれた文字をよみとることは困難であるが、『平間寺史』についてこの碑文をみると、羽佐間宗玄は代々医師として世にきこえており、家督を子にゆずってからは大森に隠栖した。つねに瓢を愛し、来訪の客には抹茶をすすめることを楽しみとして、そのため瓢仙とも施茶翁とも号していた、ということである。⁽²⁵⁾

この碑は天保六年（一八三五）に建立されたもので、甲子夜話にのる瓢仙と同一人物とみてよいであろう。これが川崎大師の境内に建立されるにいたった由来については、平間寺史にはまったくふれられていないが、その前年（天保五年）に弘法大師一千年の御遠忌を記念して大本堂が新築されたとき、時の寺社奉行が松平右近将監武厚であったことから、その藩医であり、すでに風流の道に名をあらわしていた宗玄の碑がたてられたものと推定される。⁽²⁶⁾

老婆心書の著者宗玄は芝瓢と号し、一方化物屋敷の宗玄は瓢仙と号しているが、その活躍した時期が両者とも化政期から天保期におよんでいること、その住居が両者とも芝を中心していることなどから、この両者は同一人物とみてさしつ

かえないであろう。

序文をかいた杉本仲温良

本書には著者の宗玄自身が書いた序文と、杉本良による序文の二つがみられることはさきにのべた。しかし杉本良の序文がどのような経緯で本書の巻頭をかざったかについては一言もふれていない。

杉本良は代々將軍の侍医をつとめた杉本氏の六代目にあたる(図3)。その祖先杉本忠恵(一六一八—一六八九)は、沢野忠庵に南蛮流外科を学び、寛文六年(一八六六)に江戸に出て瘍科をもって幕府につかえ、のち法眼に叙せられた、と淺田宗伯はのべているが、杉本氏の先祖書によると、忠恵元政は元和四年(一六一八)伊豆の生れで、家綱の代に外科として召し出されて二百俵をたまわり、寛文二年(一六六二)法橋をさすけられた。後水尾天皇の中宮であった東福門院(秀忠の

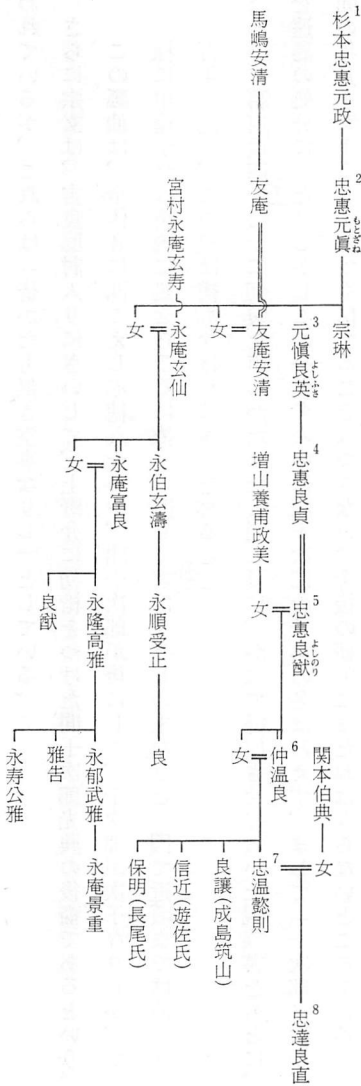


図3 杉本氏系図(著者作図)

娘和子^{わかし}の臨終にさいしては、はるばる京にのぼり治療の医師団にくわわった。元禄二年（二六八九）一〇月六日、七二歳で病死したが、法眼に叙せられたという記載はない。品川東海寺の定恵院に葬られている。法名を智峯庵宗信という。

忠恵元政の嗣子が忠恵元真^{もとまこと}（二六五二—一七二四）である。元和三年（一六八三）に家督をつぎ、貞享四年（一六八七）に奥医外科に列せられ、元禄八年（二六九五）には法眼に叙せられ、宝永六年（二七〇九）まで二三年間にわたって奥医をつとめた。享保九年（一七二四）八月一七日病歿した。六九歳であった。谷中瑞輪寺中本立院に葬られ、法名を知孝院日淨という。

忠恵元真には二男三女があった。長子の宗琳は早逝したので、家督は次男の元慎^{もとまこと}良英がつぎ（享保九年）、同じ年一二月に小石川養生所の療治をうけもち、享保一八年（二七三三）までつとめた。寛保二年（一七四二）四月三日、五二歳で死亡した。⁽²⁹⁾同じく本立院に葬られ、法名を能治院是好日差という。女子三人のうち、長は眼科奥医師である馬嶋友庵安清にとつぎ、次は小児科をもって家光につかえた宮村永庵の嗣子永庵玄仙^{はるのぶ}にとついだ。

四代忠恵良貞は寛保二年（一七四二）遺跡をついだが、寛延三年（二七五〇）四月一七日、二五歳で病死した。⁽³⁰⁾本立院に葬られ、真善院道有日善と諡された。良貞には妻がなかったため、ここに末期養子としてはいったのが宮村永庵玄仙の孫にあたる忠恵良猷である。

忠恵良猷^{よしゆり}は寛延三年（一七五〇）家督をつぎ、明和六年（一七六九）御番外科となり、天明元年（二七八一）七月一二日、四七歳で死亡した。本立院に葬られ、法名を聚徳院道勇日恵という。良猷の妻は御番外科増山養甫政美の女である。

良猷には男子がなかったので、一〇歳で養嗣子^{やしうし}にはいったのが、さきの序文をかいた仲温良である。良は良敬ともいい、明和七年（一七七〇）に生れ、⁽³¹⁾父は養父良猷の従兄弟にあたる宮村永順^{つぐよし}受正で、安永八年（二七七九）に杉本忠温良猷の養子となった。寛政六年（二七九四）御番外科となったが、同一〇年（二七九八）には一代かぎりの本道輿詰をおおせつけられ、享和二年（一八〇二）医学館世話役にすすんだ。文化五年（一八〇八）には法眼に叙せられ、多紀元簡の後をうけ

て医学館督事となり、文化一二年（一八二九）には法印になった。良は宗春院の称号をゆるされ、天保七年（一八三六）八月七日に病死した。⁽³²⁾六七歳であった。本立院に葬られ、医王院不老日仙と諡された。⁽³³⁾墓碑には親友佐藤一斎の撰文が刻されている。⁽³⁴⁾

森銑三によると、良は「医者中の詩人」であるという。⁽³⁵⁾伊達斉宗が生前ひろくあつめた漢詩五〇首、和歌五〇首を、嗣子斉義がまとめて詩歌集『五月雨』となづけた。⁽³⁶⁾これには紀伊大納言治宝や水戸宰相斉修、老中水野忠成らとともに、「長橋夜月」と題する良の漢詩がおさめられている。

長江岸遠水烟籠 潮去潮来夏夜中

橋上霜鋪天畔月 波間金湧碧蘆風

あるとき西丸の御台所が産後に浮腫が生じたので、奥医師たちにはかつて町医の片倉鶴陵に治療を依頼しようとした。このとき他の奥医たちはとくに異存はなかったが、良がすすみでて、むかし甲斐の徳本上人を召し出して、秀忠の治療にあたらせた古事があるので、町医をお召しになることは何ら妨げはないけれども、典医たちがなすべきことを行っていないのに鶴陵を召し出すというのは、大禄を拝受している甲斐がないではないか、と一人反対した。ただちに良に拝診の命がくだったので、大黄を投与して著効を呈したとの逸話が、小島蕉園の『蕉園漫筆』（天保四年）にのっている。⁽³⁷⁾

天台座主であった公澄法親王が、文化六年一二月病をえて静養中のところ、翌七年三月幕命によって、良は京都まで治療におもむいたこともある。⁽³⁸⁾

良は享和二年、医学館世話役をおおせつけられ、以後医学館の重鎮として、その運営に深くかかわっている。医学館の校刻事業として、文政一二年（一八二九）に『千金翼方』が覆刻されたとき、良は巻末に後序を認めており、⁽³⁹⁾文化一〇年から一三年にかけて覆刻された『元大徳重校聖濟総録』には、医学館総裁の肩書をもった良の序文がのっている。⁽⁴⁰⁾

良と多紀氏との関係はこれだけでなく、葉山氏の女を養女として多紀元胤にとつがせている。⁽⁴¹⁾元胤は元簡の子で、葉山

氏をめとって二子を生んだ。長子の元昕は家をつぎ、次男伯元は出て外科村山氏をついだ。良はこれによって多紀氏と姻戚関係をもつことになった。

良には五男二女があった。長男は忠温懿則で、次男良讓は奥儒者成島図書頭司直の養子となった恒之助筑山である。三男信近は遊佐東庵の養子となって寄合医師をつとめ、五男保明は御番医師長尾全庵の養子となった。⁽³³⁾

良はいくつかの著作をのこしている。随筆として『樗園偶筆』、漢詩集として『樗園詩稿』があり、医学関係では『傷寒論開題讀傷寒論』『讀傷寒論』『難經滑義補正』『医方選粹』などがある。

良の嗣子忠温懿則は寛政八年（一七九六）の生れで、文政一二年（一八二九）に医学館世話役手伝となり、天保二年（一八三一）には奥医師見習、天保四年には奥医師にすんだ。同じ年法眼に叙せられ、天保六年には医学館世話役に就任し、弘化四年（一八四七）一月一〇日、五二歳で病死した。本立院に葬られ、法名を持法院鷲山日住という。懿則の妻は奥御外科関本伯典法眼の女である。⁽³³⁾

忠温懿則の嗣子が忠達良直である。弘化四年（一八四七）寄合医師となり、安政六年（一八五九）医学所病用出役、文久三年（一八六三）医学館世話役手伝となったが、幕府の瓦解によって明治元年一月、明治新政府につかえた。⁽⁴²⁾ 忠達良直の邸は、江戸切絵図の御徒町にみえる。

序文の書家市河米庵

杉本良の序文の末尾に、「河三亥書」との銘がしるされている。この三亥とは巻菱湖、貫名海屋とともに、幕末の三筆と称せられた市河米庵である。米庵は富山藩儒者寛斎の嗣子で、安永八年（一七七九）に江戸に生れた。はじめ父寛斎について、のちに林述斎や柴野栗山について儒学を学んだ。加賀前田家につかえたが、ひろく門戸をはって書を教授し、門弟五千をかぞえたという。

書は父のほか、中国の米芾や顔真卿に学び、享和三年（一八〇三）二五歳の秋に江戸をたつて長崎におもむき、明、清の書のみて強い影響をうけた。祖父蘭台も細井広沢から指導をうけた能書家であり、米庵の子恭斎、萬庵、遂庵、孫の得庵もともに能書家として名高い。

米庵は安永八己亥年の亥月（一〇月）亥日に生れたので三亥と名のつたが、これを「サンガイ」とも「ミツイ」ともよませている。⁽⁴⁴⁾ 字は孔陽、金洞と号した。天保八年（一八三七）渡辺華山は五九歳の米庵の肖像画をかいてある。絹本着色の挂幅で、同じ華山がかいた肖像画の傑作「鷹見泉石像」とならんで、その画技の円熟達成をしめすいずれおとらぬ代表的作品というべきものである。⁽⁴⁵⁾ その華山が自らの反省の材料としてまとめた『心の掟』に、交わるべき友として一三名の人物をあげているが、谷文晁、市河米庵、檜山坦斎、立原杏所の四人を「書画の道に深き人なれば常に益あり。交りて樂しむべし」とのべている。⁽⁴⁶⁾

米庵は安政五年（一八五八）、時に流行したコレラの犠牲になった。八〇歳であった。

さきにものべたように老婆心書の著者羽佐間宗玄と杉本良の関係をしるした文書はない。また書家市河米庵と宗玄との関係をあきらかにした文書も存在しない。安永四年（一七七四）に出版された賀川玄迪の『産論翼』の序文をかいたのは柴野栗山である。その栗山の弟子にあたる市河米庵に、賀川流産科の宗玄が杉本良の撰した序文の揮毫を依頼したのではないだろうか。あるいは風流の道にあそぶ宗玄と米庵とは、詩歌や書の世界においてすでに交わりがあったとも考えられるが、後考にまたねばならないところである。

おわりに

近世の養生書の系譜に属する『老婆心書』について、その梗概をのべ、オランダの医説が一、二とりいれられている様子についてもふれた。著者羽佐間宗玄が化政期の風流人であったことをあきらかにし、序文を撰した杉本仲温良について

もその系統についてのべた。

薬研堀不動尊の地に、順天堂発祥の碑を建立するにあたり、その本山である川崎大師平間寺の貫主高橋隆天猷下に小川先生をご紹介申しあげる機会があつたことをおもいうかべながら、本論文を謹んで最後の弟子として親しくご指導いただいた故小川鼎三先生に捧げる。

本論文の要旨は日本医史学会例会（昭和五九年九月二日）において発表した。おわりにご指導ご校閲いただいた酒井シヅ助教授に感謝する。

参考文献

- (1) 佐伯理一郎 日本女科史 吐鳳堂 明治三四年 七八頁
- (2) 富士川游 日本医学史 日新書院 昭和一六年 四七二頁
- (3) 富士川游 日本小児科史 富士川游著作集一卷 思文閣 昭和五五年 二九一頁
- (4) 緒方正清 日本婦人科学史 丸善 大正三年 九頁
- (5) 緒方正清 日本産科学史 丸善 大正八年 一〇二二頁
- (6) 同書 一三頁
- (7) 梶完次 日本産事紀要 臨床産科婦人科 一〇卷七四二頁 昭和一〇年
- (8) 梶完次 明治前日本産婦人科学史 明治前日本医学史四卷 昭和三九年 一九九頁
- (9) 羽佐間宗玄 老婆心書 文化一四年
- (10) 梶完次 明治前日本産婦人科学史 一五四頁
- (11) 賀川子玄 産論 明和二年 四卷四丁
- (12) 杉田玄白 解体新書 安永三年 四卷
- (13) 梶完次 日本産事紀要 八三四頁
- (14) 同書 八三六頁

- (15) 同書 八三八頁
- (16) 羽佐間宗玄 為己執記 文政九年 慶応義塾大学医学部図書館蔵
- (17) 緒方正清 日本産科学史 一六三頁
- (18) 白土龍峯 江戸今世医家人名録初編 日本医史学雑誌 二四卷七二頁 昭和五三年
- (19) 白土龍峯 今世医家人名録 文政三年 南三丁 医家伝記資料上 青史社 昭和五五年
- (20) 内務省衛生局 日本医籍 忠愛社 明治三二年 一四頁
- (21) 松浦静山 甲子夜話統篇四 中村幸彦 中野三敏校訂 平凡社 昭和五五年 一一七頁
- (22) 齊藤月岑 増訂武江年表二 金子光晴校訂 平凡社 昭和四三年 八三頁
- (23) 松浦静山 甲子夜話三篇一 中村幸彦 中野三敏校訂 平凡社 昭和五七年 九三頁
- (24) 福本日南 元禄快挙録下 岩波書店 昭和五七年 三〇五頁
- (25) 佐藤教倫 平間寺史 平間寺出版部 昭和九年 二四〇頁
- (26) 深瀬泰旦 化物屋敷と瓢箪碑——化政期の風流人羽佐間宗玄 川崎市産業文化会館学芸課紀要七号投稿中
- (27) 浅田宗伯 皇国名医伝上巻 嘉永四年 二九丁
- (28) 杉本仲温 先祖書 寛政一一年 順天堂大学図書館蔵
- (29) 寛政重修諸家譜には四五歳とある。新訂寛政重修諸家譜第二〇 統群書類従完成会 昭和四一年 二一九頁
- (30) 同書には一八歳とある。前掲書 二一九頁
- (31) 同書により生年を算出すると宝曆一二年(一七六二)となる。前掲書 二一九頁
- (32) 森潤三郎 多紀氏の事蹟 日本医史学会 昭和八年 一六四頁 には「八月八日卒す」とある。
- (33) 杉本忠達 先祖書 元治元年 順天堂大学図書館蔵
- (34) 森潤三郎 前掲書 一六四頁
- (35) 森銚三 妙々奇談余言 森銚三著作集一一巻 中央公論社 昭和四六年 三七五頁
- (36) 松浦静山 甲子夜話五 中村幸彦 中野三敏校訂 平凡社 昭和五三年 一六九頁
- (37) 小島蕉園 蕉園漫筆 天保四年 慶応義塾大学医学部図書館蔵
- (38) 文恭院殿御実紀 国史大系統徳川実紀一篇 吉川弘文館 昭和五一年 六四八頁

- (39) 森潤三郎 前掲書 二五八頁
- (40) 同書 二六五頁
- (41) 同書 一三二頁
- (42) 杉本仲温⁴ 差出候書類留 明治元年 順天堂大学図書館蔵 (この仲温はおそろしく忠達の誤りとおもわれる)
- (43) 渡俊治 儒家小誌 文求堂 大正十一年 一三頁
- (44) 森銑三 著作堂を訪うた人々 森銑三著作集四卷 中央公論社 昭和四六年 四七〇頁
- (45) 菅沼貞三 華山の研究 木耳社 昭和四四年 一三八頁
- (46) 森銑三 谷文晁伝の研究 森銑三著作集三卷 中央公論社 昭和四六年 二六二頁

(東京慈恵会医科大学講師
順天堂大学医学部医史学研究室)

Hazama Sogen, Author of “Roba-shinsho” and Sugimoto Ryo

by

Yasuaki FUKASE

“Roba-Shinsho” written by Hazama Sogen, an intellectual of the Bunka Bunsei Period, was a two-volume book relating to the field of both obstetrics and pediatrics published in 1817. Sogen, who belonged to the school of Kagawa, advocated restricting the use of the maternity belt and recommended an ordinary diet during pregnancy. He also recommended non-artificial childrearing, avoiding excessive warmth, and suckling.

It also became clear in the reading of this work, that Sugimoto Ryo, who wrote the preface to “Roba-shinsho” was an eminent doctor of the Tokugawa Shogunate.